

上山あゆみ

タガログ語の名詞句は、ANG格・NG格・SA格のいずれかでしるしづけられている。のうち、NG格とSA格は θ 役割と密接に関連しているが、ANG格は主語に相当し、構造格であると考えられる。本発表は、タガログ語の関係節の分析を通して、この格がINFLのAGRによって付与されるものではないことを主張するものである。格付与者は動詞であり、語彙部門において、 θ 枠のどの項が被格付与者であるかという指定があると考ええる。

タガログ語では、通常、NG格は関係節化できない(= (1))が、特別にANG格と共起しない動詞が主要部となる関係節では、NG格でも関係節化できる(= (2))。

- (1) *diyaryo -ng [b-um-abasa ang lalaki]
 newspaper-LK AV-read ANG man
 'newspaper which the man read'
- (2) diyaryo -ng [ka-babasa lang ng lalaki]
 newspaper-LK RP-read just NG man
 'newspaper which a man has just read'

この非対称性は、動詞とANG格との間に強い関係が結ばれていることを示している。特に、ここでは格付与関係が障壁を形成しているので、この障壁をBARRIERと名付けた。

BARRIERは英語の分析にも有用である。従来のbarrierの概念では、(3-7)のような場合、不要なところに障壁ができてしまい、ad hocな規定が必要であったが、BARRIERの概念では、格付与がなければ障壁ができないので、そのような心配はない。

- (3) John was [_{UP} killed [t]]
- (4) John [_{UP} seems [_{CP} [_{IP} t to win]]]
- (5) John [_{UP} seems [_{CP} [_{IP} e to be [_{AP} likely [_{CP} [_{IP} t to win]]]]]]]
- (6) *John [_{UP} seems [_{CP} [_{IP} (it) is [_{AP} likely [_{CP} [_{IP} t to win]]]]]]]
- (7) I [_{UP} believe [_{CP} [_{IP} him to be honest]]].

ただ、wh移動についてはbarrierの概念が有効であるので、この二つの概念の使い分けについて、さらに考察を加えていきたい。

(うえやま あゆみ, 博士後期課程)